

コナジラミ類に注意！

1 加害作物

きゅうりなどのウリ科、なすやトマトなどのナス科のほか、多くの作物を加害する。

2 発生と今後の予想

- 今年度の9月下旬における巡回調査の結果、露地なすおよび施設きゅうりで平年値を大きく上回った（表1）。
- 大阪管区気象台の近畿地方1か月予報（9月29日発表）では、向こう1か月の気温は平年より高い確率が50%となっており、**今後も多発傾向が続く可能性が高い**。

表1 令和4年9月後半の巡回調査結果（頭/葉）

	巡回調査結果	平年値
なす（露地）	0.58	0.02
きゅうり（施設）	1.72	0.06
トマト（施設）	0.02	0.01

3 生態と被害

- きゅうり、なす、トマトではタバココナジラミ（図1、2）とオンシツコナジラミ（図3、4）が加害する。
- 両種とも**幼虫は葉裏に付着しており、体長0.8～1mm程度の小判型**である。1齢幼虫を除くと移動はしない。**成虫の体長は1mm程度で翅は白い**。また、両種の形態は類似しており、肉眼で区別することは困難であるが、ルーペを用いて成虫・幼虫の形態を観察することで、どちらの種が発生しているかを把握できる（表2）。

表2 タバココナジラミとオンシツコナジラミの違い

	タバココナジラミ	オンシツコナジラミ
成虫	・翅を閉じている時、翅先が重ならない ・体色は黄色	・翅を閉じている時、翅先が重なる ・体色は白っぽい黄色
幼虫	・体色は黄色 ・体の周辺は無毛	・体色は半透明で白っぽく、一部淡い黄色 ・体の周辺が有毛

- 成虫及び幼虫が作物を吸汁することにより株が衰弱するとともに、排泄物に黒いかび（すす病）が生じる。また、トマトではタバココナジラミによる果実の着色不良が問題となる。
- タバココナジラミは、きゅうりやトマトでは以下のウイルスを媒介することから、注意が必要である。**

○きゅうり：退緑黄化病（図4）

- 発病初期は、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・癒合しながら徐々に黄化する。症状が進展すると葉脈に沿った部分を残して葉全体が黄化する。
- 定植直後から発病し、草勢が低下するため収量が減少する。

○トマト：黄化葉巻病（図5）

- 発病初期は新葉の葉縁から退緑、葉脈間が黄化する。その後、葉巻き、縮葉等の症状を示し、生長点付近の節間が短くなって叢生状態となる。発病後は新芽が正常に生育しない。
- 定植直後から発病し、発病後は開花しても結実しないことが多い。

4 防除対策

○侵入・産卵防止

- (1) ハウス栽培では、開口部を0.4mm目合いのネットで被覆する。

○薬剤防除

- (1) 幼虫は葉裏に寄生しているため、葉裏に十分にかかるように薬剤を散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避ける(系統については別添防除薬剤例、病害虫防除指針などを参照)。

○その他防除

- (1) コナジラミ類の増殖を抑えるため、ほ場や周辺の除草に努める。また、ウイルスの感染の有無にかかわらず、摘除した茎葉などの残さは放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。
- (2) 前述のウイルスに感染した場合、治療方法は無い。感染の拡大を防ぐため、発病株はすぐに抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。
抜き取った発病株やその疑いのある株は、必ずビニール袋に入れるなど適切に処分し、ほ場外などで根付いて新たな伝染源とならないようにする。
- (3) 黄色の粘着トラップ(商品名:ホリバーなど)を設置・観察することにより、コナジラミ類の初発時期や発生量の多少を把握しやすくなる。
- (4) コナジラミ類に対しては、生物農薬(天敵微生物や天敵生物)や気門封鎖剤が登録されている。これらは化学合成農薬の効果が低下したコナジラミ類に対しても効果が期待でき、薬剤抵抗性が発達する可能性が低いという利点がある。



図1 タバココナジラミ成虫
(体長1mm程度)



図2 タバココナジラミ幼虫
(体長0.8~1mm程度)



図3 オンシツコナジラミ成虫
(体長1mm程度)



図4 オンシツコナジラミ幼虫
(体長0.8~1mm程度)



図5 退緑黄化病の被害葉(きゅうり)



図6 黄化葉巻病の被害症状(トマト)

図1、図5：地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 提供

図2、図3、図4：大阪府植物防疫協会 提供

<別添>コナジラミ類の防除薬剤例

作物	薬剤名	系統 (IRAC)	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数
きゅうり	グレーシア乳剤	メタジアミド(30)	2,000倍	収穫前日まで	2回以内
	アグリメック	アベルメクチン (6)	500~ 1,000倍	収穫前日まで	2回以内
	コルト顆粒水溶剤	ピリゾン アゾメチン 誘導体(9B)	4,000倍	収穫前日まで	3回以内
	トランスフォーム フロアブル	スルホキシイミン (4C)	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内
トマト	グレーシア乳剤	メタジアミド(30)	2,000倍	収穫前日まで	2回以内
	ベネビアOD	ジアミド(28)	2,000倍	収穫前日まで	3回以内
	アグリメック	アベルメクチン (6)	500~ 1,000倍	収穫前日まで	3回以内
	ディアナSC	スピノシン(5)	2,500倍	収穫前日まで	2回以内
なす	ベストガード 水溶剤	ネオニコチノイド (4A)	1,000~2,000倍	収穫前日まで	3回以内
	トランスフォーム フロアブル	スルホキシイミン (4C)	1,000~2,000倍	収穫前日まで	2回以内
	コルト顆粒水溶剤	ピリゾン アゾメチン 誘導体(9B)	4,000倍	収穫前日まで	3回以内
	モベント フロアブル	ピロリジン酸およびピロリジン 酸誘導体(23)	2,000倍	収穫前日まで	3回以内
野菜類	サフオイル	—	300倍	収穫前日まで	—
	オレート液剤	—	100~ 300倍	発生初期~ 収穫前日まで	—
	サンクリスタル乳剤	—	300倍	収穫前日まで	—
	ボタニガードES※1	—(微生物農薬)	500倍	発生初期	—
野菜類 (施設)	ボタニガード水和剤 ※1	—(微生物農薬)	1,000倍	発生初期	—
	エンストリップ※2	—(生物農薬)	25~30株当たり 1カード	発生初期 (放飼)	—
	スワルスキー※3	—(生物農薬)	250~500mL/10a (約25000~50000 頭)	発生直前~発生 初期 (放飼)	—

※1 ボタニガードES、ボタニガード水和剤は微生物農薬である。なお、効果的に使用するには以下の注意を遵守する。

- 注1：湿度を好むため、散布後15～24時間は80%以上の湿度を保つ。
注2：発生初期に7日間隔で3～4回処理、夕方など湿度を十分に確保できる条件で散布する。
注3：効果が発現するまで1週間～10日程度必要となるため、害虫の発生初期に使用する。

※2 エンストリップは生物農薬（オンシツツヤコバチ）である。なお、効果的に使用するには以下の注意を遵守する。

- 注1：オンシツツヤコバチの生存日数は短いので、入手後直ちに使用し、使いきる。
注2：コナジラミ類の生息密度が高くなってからの放飼は十分な効果が得られないことがあるので、これらの害虫がまだ低密度で散見され始めたときに最初の放飼をする。
注3：天敵としてオンシツツヤコバチが有効な密度（1株当たり約2頭）を保つため、オンシツコナジラミとタバココナジラミの発生初期より1～2週間間隔で圃場全面に放飼することが望ましい。
注4：オンシツツヤコバチの活動に影響を及ぼすおそれがあるので、本剤の放飼前後の薬剤散布は避ける。

※3 スワルスキーは生物農薬（スワルスキーカブリダニ）である。なお、効果的に使用するには以下の注意を遵守する。

- 注1：スワルスキーに長期間影響のある薬剤は散布しない。
注2：施設の側面、天窓などに防虫ネットを張って外部からの害虫の侵入を減らす。
注3：粘着トラップを併用して、コナジラミ類の成虫の密度を下げる。
注4：スワルスキー放飼前に影響の短い薬剤を散布して、スワルスキー放飼時の害虫密度を極力ゼロに近づける。
注5：放飼後1～2週間は薬剤散布を控える。

- ・登録は令和4年9月26日現在
- ・最新情報は農林水産消費安全技術センターの農薬登録情報提供システムで確認してください。
(<https://pesticide.maff.go.jp/>)
- ・このほかの剤については、Web版大阪府病害虫防除指針も参照してください。(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

農薬の安全かつ適正な使用を徹底し、農薬の使用に伴う事故・被害を防止しましょう。